

源氏物語

末摘花

松尾聰
永井和子
校註

笠間書院刊

氏物語

末摘花

和子聰
校註

笠間書院刊

昭和六十三年四月三十日 初版発行

松尾 聰 (まつお さとし)

明治四十年生れ。昭和六年東京帝国大学文学部国文学科卒業。同九年同大学院修了。同年法政大学予科専任講師、同十一年学習院専任講師、同十三年学習院教授、同二十四年学習院大学教授、同五十二年停年退職。同年学習院大学名誉教授。文学博士(平安時代の散佚物語の研究―東京大学)。「平安時代物語の研究」(武蔵野書院)。「平安時代物語論考」(源氏物語を中心とした『うつくし・おもしろし』)。「源氏物語を中心とした語意の紛れ易い中古語攷」(堤中納言物語全釈(以上笠間書院)、「全釈源氏物語」一六(桐壺朝顔)(筑摩書房)「古文解釈のための国文法入門」(研究社)その他約三十点の著書がある。

永井和子 (ながい かずこ)

昭和九年生れ。昭和三十二年お茶の水女子大学文教育学部文学科卒業。同三十三年同大学専攻科修了、同三十五年学習院大学大学院修士課程修了。現在学習院女子短期大学教授。学習院大学講師。「瘦寛物語の研究」(笠間書院)、「伊勢物語」(訳注)(創英社)、その他松尾との共著十数点(『日本古典文学全集』枕草子)などがある。

校註者
の 検印
省 略

源氏物語 末摘花

定価 四〇〇円

校註者

松尾 聰

永井 和子

発行者

池田 つや子

東京都千代田区猿樂町二ノ二ノ五

発行所 笠間書院

電話東京(二九五) 一三三一番

振替口座東京一―五六〇〇二番

解説

末摘花の巻は源氏物語の第六帖目にあたる。

巻名は光源氏の歌「なつかしき色ともなしに何にこのすゑつむ花を袖にふれけむ」による。末摘花は花の名で、紅花の異名。ここから姫君の呼称ともなる。歌意その他は本文を参照されたい。

光源氏十八歳の春から、十九歳の正月ごろまでのほぼ一年間を描く。主な登場人物の年齢をあげれば、この巻では年齢が把握できるのは光源氏のほかは紫の君だけということになり、十歳から十一歳までとなる。末摘花の年齢については明記がなく、特定しがたいが、本文に「古代のゆゑづきたる御装束なれど、なほ若やかなる女の御よそひには、似げなうおどろおどろしきこと、いともてはやされたり。」などの叙述が見えるので、おおよその見当として「若い女性」と位置づけて間違ひなからう。即ち光源氏との間にさまざまの不適合性がこの巻で語られることになるものの、根幹の問題として年齢的にはまさに適合していた男女であったからこそ、このすれちがいのもつ痛ましさも滑稽感も際立つのである。頭中将は、物語の中で長い期間にわたって登場する主要な人物ではあるが同様に年齢の明記はなく、光源氏とはほぼ同じ年頃として設定されているようである。末摘花と源氏の間立つ大輔命婦は「いといたう色好める若人」と紹介されているし、乳母子であるから光源氏と同年輩である。こうしてみると、光源氏を軸としてこの巻の主な登場人物はすべて若い。このことの意味は又後に述べよう。

梗概を述べる。光源氏は可憐な夕顔を突然失い、傷心のうちに夕顔と同じように純粋な愛情を注ぐ

ことのできる女性をひたすら求めていた。乳母子の大輔命婦が、話のついでに故常陸の親王の事を口にしたのはそのような折のことである。琴を友として淋しい孤独な境涯を慰めている高貴な姫君、という話に源氏は強く心をそられ、春の十六夜の月の許に命婦の手引きで常陸宮邸に忍び込み、ひそかに琴の音を聞く。帰る時に源氏は恋路の跡をつけてきた頭中将に出逢い、姫君に対する思い入れは競争者が出現したことでますますあおられることになる。命婦はやや困惑のていであるが、春・夏のころは源氏も瘧病にかかったりして心の暇もなく過ぎて行つた。病も癒えた秋になると源氏は命婦を責め立て、八月二十日すぎ、頭中将の先を越してやっと姫君に逢うことができた。ところが逢ってみると何やら邸全体の様子が風変わりで、姫君は物も言わず、万事合点がいかない。夕顔に代わるべきかわいい女性という源氏の期待はたちまちに冷め切つてしまい、気の毒に思う気持だけが強く残る。源氏は夕方になってやっと後朝の文をとどけたが、それに対する姫君の返事も見る甲斐がないほど奇妙である。秋は桐壺帝の朱雀院行幸の準備や、紫の君を自邸に迎えた忙しさのうちに過ぎて行く。冬に入り、ある雪の夜、源氏は常陸宮邸を訪れるが、寒さの中の女房達の様子は見るに堪えぬほどの貧窮と荒廃を示し、源氏にとってはまさに異世界であつた。翌朝、雪明りの中ではつきりと見た姫君の容貌は、尋常ではない。特に目立つのは、高く長く伸び先の方が少し垂れて赤く色づいてゐる鼻であつた。髪だけは長く豊かではあるけれど、着ているものも甚だ古風で珍妙である。源氏はいよいよ言うべき言葉もなく、急いで出る折に歌を詠みかけると、姫君は「むむ」と笑うのみである。年も暮れ、姫君は源氏に正月用の衣裳に歌を添えて贈るが、いずれも源氏を辟易させる代物であつた。正月七日、源氏が常陸宮邸を訪れてみると、源氏からの援助を受けて全体の様子はやや好転した模様ではあるが、姫君の有様は相変らず奇妙で、特にまた例の鼻が見苦しい。二条の院で、かわいらしい

紫の君と難遊びに心を寛がせているうちに、あの姫君―末摘花―の鼻が、自分の滑稽で苦しい失敗の証のように甦ってきて、赤鼻の女の絵を描いたり、自分の鼻に紅をさしたりして戯れてみるのだった。この二人こそすばらしい似合いの間柄と見えた。以上のような内容である。

この末摘花の姫君は第十五帖蓬生の巻で再び女主人公として取り上げられるが、そこでは「待つ女」としての、誠実さや、純粋性を持つ女性として描かれており、末摘花の巻の造型とはやや異なった主題性を持つようになる。この二つの巻の差異を如何に解するかについてさまざまな論があるところであるが、詳しくは蓬生の巻について見られたい。そのほか玉鬘・初音・行幸・若菜上の諸巻に断片的に風変わりなその姿が見え、いずれも末摘花の巻の造型と矛盾するものはない。

この巻の書き出しの部分は、前述のごとく失ってしまった夕顔に代るやさしいかわいらしい人を渴望する源氏の心情から始まっている。末摘花は結局その期待を裏切る女性であって、巻の終りは紫の君と源氏との仲睦まじい間柄を描いて閉じる。即ちこの巻はその末摘花の話が中心となつてはいるものの、物語全体からすると、第五帖夕顔の巻を承ける、源氏の若き日の、女性達をめぐる話の一齣なのであって、同時に紫の君を見出す話に取り込まれた形となつて存在している。更に紫の君の話に戻つて終り、結果的には紫の君との出逢い自体も、その内的契機としては、藤壺のことは措くとして、夕顔急死の失意とそれに代るものへの期待が源氏の側にあってはじめて成り立ったものであるということになる。年時的に言つても、第五帖若紫の巻は源氏十八歳の春三月から十月頃を描くのであるから末摘花の巻と時期が重なり、以上の点からも古来末摘花の巻は若紫の巻の「並びの巻」として解されている。前述のごとく巻の中に春の瘧病、秋の紫の君自邸引きとり、といった若紫の巻に描かれている内容がそのまま取り入れられ、同じ時期に別の話によつて若紫の巻を補完した形となる。必然

的に人物像としても末摘花は紫の君と対比され、結果的には、物語の中心的人物としての紫の君の理想性が際立つことになって、このあたりは成立の順序の問題とも絡み複雑な様相を示している。まず紫の上をめぐる一連の話が成立し、そのあとから挿入された短篇的な巻の一つではないかとの推定も存在する。

この末摘花の造型の神話的原型としては、他界的イメージのある常陸の霊を父親王から承けた「黄泉津醜女」の面影があるとも、又、紫の君の「木花咲耶姫」に対し「石長姫」の系列であるともいわれる。大山祇神は美しい妹娘に対する天孫の求婚に際し、みにくい姉娘の石長姫を添えて奉った。石長姫は石のごとき永遠性を象徴するからである。紫の君と対偶関係にあること、源氏物語中の女性像としては極めて特異である点からしても、かくの如き視点も有効とならう。

光源氏の物語として把握すると、源氏はまさに失敗したことになる。心の深奥に発した若者らしい純粋な憧憬は打ちくだかれ、その傷の奇妙な味わいは巻末の末摘花に対する揶揄にこめられた自嘲に微妙に表現されている。源氏は失敗を自分の責任として受けとめ、恋愛の対象としてではなく、一人の援助すべき人として直ちに意識を切り換えるのであるが、末摘花の側はあくまでも源氏の愛情の対象者として振舞うためにここに滑稽なずれが生じてしまう。

なぜ源氏は失敗したのか。若紫の巻にあつては、源氏のひたむきな純粋さはプラスに作用して理想の人を得たのであるのに。その原因をいくつか挙げておけば、一つには源氏は夕顔に代る女性を希求するあまりに、不用意にも現実のなりゆきに対して鈍感に過ぎたことである。その経緯の中で末摘花の異常さは充分に予想できたにもかかわらず源氏は幻を強引に作りあげてしまう。困惑した命婦がかなりはつきり事実を告げているのに、思い込んだ源氏の方は変らない。これには競争者頭中将の存

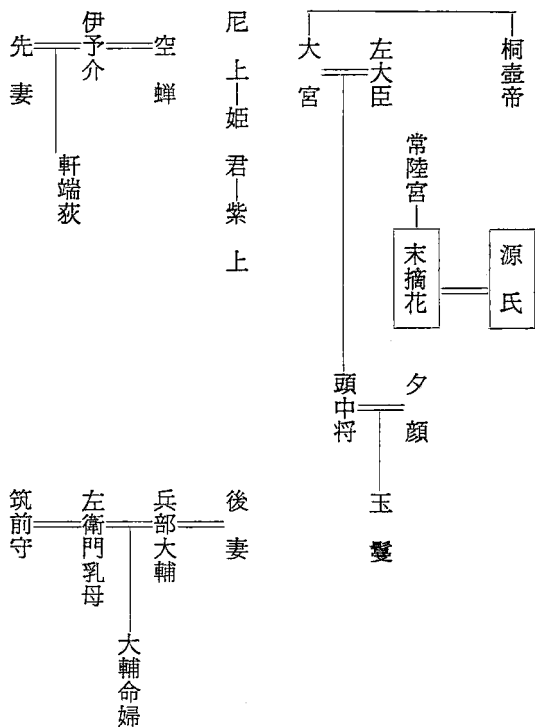
在もあずかつていよう。第二に源氏は命婦を信じすぎた。命婦の些か軽い部分が見抜けなかったのはもとより、女房なる得体の知れぬ存在をも把握し切ってはいない。第三に紫の君を源氏は垣間見し、実際に自分の心に直接に感じた衝撃を大切にして行動にうつしたのであるが、末摘花の場合にはこの直接の感動といった手つづきが脱落している。琴の音を聞いたが、その琴の音もこの命婦によって巧みに演出されたものであることに気づかない。第四に若紫の巻に見えた老賢者群——北山の聖・僧都・尼君——や、良清・惟光といった従者達はこの巻には登場せず、代りに常陸宮邸の老女房や鍵預りの翁といった老者や、その他の分別の足りぬ女房達が脇におり、主体となるのは前述のごとき若い人達である。

以上のごとくやや公人めいた、若紫の巻の源氏の属する世界と、そうした大人達がおらず、若い人が大人からの干渉を受けずに行動するといった、私人としての源氏の属する世界とは、全く異なるが如くここでは描かれるのであり、この書き分けに、前述のごとく紫上系十七帖（桐壺・若紫・紅葉賀・花宴・葵…）に対し、玉鬘系（帚木・空蟬・夕顔・末摘花・蓬生…）の中の品の女の物語として区別して把握される余地も存する。いずれにせよ、異質の世界や時間をこのように鮮かに共存させる形で、我々の前に存在する、というのが現在の源氏物語の姿である。ともあれ、源氏は末摘花にどうしても出逢わねばならぬように作者は巧みに情況を設定した。それも、源氏の失敗ともいふべきものの原因は若さであるように作り為してあるのは上記の通りである。しかしこうした私的な世界の出逢いはあっても、その古風な律気さのおかげで、源氏をめぐる女性群の一人としての末摘花の振舞いは邸内の衆目にさらされることになり、源氏の世界の秩序の中できしみを生じる。それではなぜこの物語の中で末摘花の登場が必要であったのかということが、この巻以降の課題となって来よう。

この奇妙な成り行きを源氏の側では「わがかうて見馴れけるは、故みこのうしろめたしとたぐへおきたまひけむ魂のしるべなめりとぞ、おぼさる」というふうにならざるに故常陸宮の魂の導きによる必然ととらえる。源氏が必然と感じ、又自らの責任に於いて出逢った人であつてみれば、末摘花がたとえ夕顔の代りとはなり得ずとも、「心長く見はててむ」と思い、又暮らし向きに關して「まめやかなるさまに、常におとづれたまふ」とあるように、別枠の女性としてきちんと待遇する。末摘花という特異な女性登場が物語になぜ必要であつたかという問いかけと同時に、光源氏の極く若い頃の造型によつて、この自覺的な女性の処遇が、紫の君を迎え取つたのと同じく、若者らしい爽やかさと、大人への出発といった、決然たる一種の風格とを与える道筋であつたとみること可能である。理想的な異性への希求の中に、紫の君も末摘花も位置づけられるのである。

なお、主として徳川美術館・五島美術館所蔵の「源氏物語絵巻」（いわゆる隆能源氏）の、断簡と推定されるものがいくつか存在している。そのうちの二つに末摘花の巻の詞書の断簡があり、「されはよとんねつふれたまふうちつきてあなかたはとみ□るものはなゝりけりふとめそとまるふけんはさちのゝりものと（さればよと、胸つおれ給ふ。うちつぎて、あなかたはと見^四るものは鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物と）」とよめる。又、一二〇〇年頃に成立した物語評論書である無名草子には末摘花に対する言及が見える。その他いろいろな意味で末摘花は後代に大きな影響を与えた。まずこの巻の本文を自らの眼で虚心に読みといた上で、こうした外部の資料に當つてみると、又新たな、そして豊かな発見があることであらう。

（永井和子執筆）



凡 例

一 本書は大学・短期大学・高等学校などの演習用ならびに講読用教科書として編纂したが、一般読者の利用にも堪えると考えている。

一 本書本文は「源氏物語大成」の底本文(平安博物館蔵大島雅太郎氏旧蔵飛鳥井雅康筆本)に拠る。若干の誤脱とおぼしき部分は、大成所収の、主として青表紙系諸本などによって仮りに改めたが、一々その旨を「頭注」にしるして底本の本来の姿ものこすようにした。というのは、その誤脱と一往考えて改めたものと本文(底本文)の方が原作の本文に近くて、改めるために用いた本文は後人の改竄の手を加えたものでないともかぎらないからである。なお大成の底本は大島本であるが、校合用の青表紙本は横山本、池田本、肖柏本、三条西家本(以上四本のうち三本以上の本文が一致する場合は、「頭注」で「諸本」と記した)であり、河内本は七毫源氏、高松宮家本、尾州家本、平瀬本、大島本(底本トハ別ノ本)、鳳来寺本、別本は御物本、陽明家本である。

一 本文には、教科書としての性質上適宜段落を設け、仮名に漢字を宛て、漢字を仮名に変え、仮名づかい、送り仮名を改め、句読点、濁点などを加え、会話はカギでかこんだ。ただし会話の初めに会話主の名を括弧に入れて付記するのは学習者の読解力養成の妨げとなることを慮って、敢えて控えた。なお「ん」は、支障のない限り「む」に統一した。

一 頭注は簡略を旨としたが、特に本文の解釈に疑問がある箇所などについては、できるだけくわしく触れるようにした。

一 本書本文ならびに頭注は、松尾聰が作成し、解説は、永井和子が執筆した。

- (1) やはりさらにかわいく思つてみて、
 (2) 夕顔の死は前年の八月「年月経る」は少々おかしいが、当時の年月の算え方は足かけだから、これで正しいとする説もある。
 (3) 葵上(正妻)や六条御息所(故東宮妃)などをさす。
 (4) 女性同士の競争心の強さ。「御」の読みについては三頁注(5)参照。
 (5) 人なつこくうちとけていた夕顔の様子。
 (6) 「おもはえ」(「おもはれ」の古形)の音転。自然に感じられる。主語は「け近くうちとけたりし(夕顔ノ様)」。
 (7) 「おぼえ」は世間からの思われ方。
 (8) 「うたえ」は「勞痛し」の約といわれる。甚しくいたわりたう感じである。可憐だ。
 (9) 気がぬのいらぬような女性を。
 (10) 「しがな」は「ししたいものだなあ」の意。
 (11) 性懲りもなく。「ま」は情態の意をあらわす接尾語という。
 (12) 「ゆゑ」は物事のおこる本質的な原因・理由・由来をいうが、中古ではそのすぐれたものについて言うことが多い。「ゆゑづく」はすぐれた由来を持つて

思へどもなほあかざりし夕顔の露にのくれし心地を、年月経れどおぼし忘れず、⁽³⁾ こともかしこもうちとけぬかぎりの、けしきばみ心深きかたの御いどましさに、⁽⁴⁾ け近くうちとけたりしあはれに、似るものなう恋しくおもほえたまふ。⁽⁶⁾

いかでことごとしきおぼえはなく、いとらうたげならむ人の、つつましきことなからむ、見つけてしがなと、⁽¹⁰⁾ 懲りずまにおぼしわたれば、すこしゆゑづきて聞こゆるわたりは、御耳とどめたまはぬ限なきに、⁽¹⁴⁾ さてもやとおぼし寄るばかりのけはひあるあたりこそ、一くだりをもほめかしたまふめるに、なびききこえずもて離れたるは、⁽¹⁵⁾ をさをさあるまじきぞ、いと目なれたるや。⁽¹⁶⁾ つれなう心強きは、⁽¹⁷⁾ たとしへなうなさけお

- (1) 極端きょくたんに身の程をわきまえない様
 子であつて、そのくせそのまま
 押し通せもせず、
 (2) 平凡へいふんな男の妻になりなどする
 女。
 (3) 底本「ける」。仮りに諸本に従う。
 (4) 源氏・空蟬くうせみ巻に見える女性。伊
 予介の後妻。源氏に一度会つた
 が、その後は容易に麻あかなかつ
 た。夕顔巻では夫に伴われて伊
 予國に下つてゐる。
 (5) 空蟬の嫁娘。伊予介の先妻の子。
 源氏は空蟬と人違ひとがへへして一夜の
 契を結んだが、今は藏人少将と
 結婚してゐる。
 (6) 空蟬巻で源氏が、空蟬と軒端のき萩
 とが基を打つてゐるのをぞき
 見した折のこと。
 (7) 源氏の乳母の呼び名。
 (8) 大式おほしきの乳母。源氏は乳母の中で
 この女を最も重んじていた。
 (9) 女房の呼び名。命婦は五位以上

くるるまめやかさなど、あまりもののほど知らぬやうに、さてしも過ぐ
 しはてず、なごりなくくづほれて、なほなほしき方に定まりなどするも
 あれば、のたまひさしつるも多かりけり。⁽³⁾

か(4)の空蟬くうせみを、もののをりをりには、ねたうおぼし出づ(5)。萩はぎの葉も、さ
 りぬべき風の便りある時は、おどろかしたまふをりもあるべし。灯影(6)の
 乱れたりしさまは、またさやうにても見まほしくおぼす。おほかた、な
 ごりなきもの忘れをぞ、えしたまはざりける。

左衛門(7)の乳母めのととて、大式(8)のさしつぎにおぼいたるがむすめ、大輔(9)命婦
 とて、うち(10)にさぶらふ、わかむどほりの兵部大輔(11)なるむすめなりけり。
 とい(12)たう色好める若人わかしとにてありけるを、君も召し使ひなどしたまふ。

- の婦人、又は五位以上の者の妻。命婦は何かいので、父・夫・兄などの官職名を冠して区別する。
- (11)(10) 皇族の血筋の。「王家(わか)み(み)の通り」が語源かという。
- (12) 兵部省の次官。正五位下相当。
- (1) 大輔命婦の母。兵部大輔とは離別、再婚しているのである。
- (2) 兵部大輔は常陸官の縁者なのであろう。官邸を実家として住んでいる。
- (3) 上総・常陸・上野は国司の長官を大守と呼び親王を任命した。赴任はせず介が実務を執った。
- (5)(4) 「かなし」は痛切にかわいい意。「御」の訓に「オン」があらわれる漢文訓読文獻は中古末に始まるといわれるので、源氏物語における漢字書きのこれらの「御」を訓読する場合にはすべて「おはん」と読むのが無難か。「お身をひそめてさし出ず」にいて、わが身をへ人と付き合わないよう(7)に)処置する。
- (8) 「さへき」の無表記。
- (9) 「ゆふべ」の次ぎ「よなか」の前。日が暮れて暗くなつてからをいう。
- (10) 簾・几帳・障子(現在の襖)などを隔てて会うこと。
- (11) 中国伝来の七絃琴。延喜天曆以後あまり演奏されなくなつていった。
- (12) 「なつかし」は「なつく」(馴れ

末 摘

花

(1) 母は筑前守のめにてくだりにければ、父君(2)のもとを里にて行きかよふ。

故常陸(3)の親王(4)の、末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし御(5)

むすめ、心細くて残りゐたるを、もののついでに語りきこえければ、

「あはれのことや」

とて、御心(5)とどめて問ひ聞きたまふ。

「心ばへかたちなど、深き方はえ知りはべらず。かいひそめ、人うと

うもてなしたまへば、さべきよひなど、物越しにてぞ語らひはべる。

琴(11)をぞなつかしき語らひ人と思へる」

と聞こゆれば、

(13) 「三つの友にて、いま(14)くさやうたてあらむ」

てまつわりつくの形容詞。親しい。

(13)「今日北窓ノ下。自ラ問ヒテ何ノ為ス所ゾ。欣然トシテ三友ヲ得タリ。三友ハ難トカ為ス。琴罷(ヤ)ミテ輒(スナハ)チ酒ヲ拵ゲ、酒罷ミテ輒チ時ヲ吟ズ。三友ハ通(タガ)ヒニ相引キ循環シテ已(ヤ)ム時無シ」(白氏文集、北窓三友、酒をさす)

(15)(14)「うたて」(ひどく不愉快に、の意)は副詞。形容詞「うたてし」の発生は中古末以後。

(1)「よしづく」は豊かな趣味教養を身につけていること。

(2)底本「てには」であるが、仮りに諸本によつて「つかひ」を補う。

(3)「けしきはまし」(思わせぶりだ)は「けしきばむ」の形容詞。

(4)その時は宮中から宮邸に退出して手引きしてくれ。

(5)よそ(新しい妻の所)に。わざわざ「ほかに」とあるのは、常陸宮邸に住むのが本来なのに、意がある。大輔の君は末摘花の兄か。ただし蓬生巻に、邸を訪ねるのは兄と禅師の君だけとあるのが不審。

とて、

「我に聞かせよ。父親王^みの、さやうの方にいとよしづきてものしたま⁽¹⁾

うければ、おしなべての手づかひにはあらじとなむ思ふ⁽²⁾」

とのたまへば、

「さやうに聞こしめすばかりにはあらずやはべらむ」

と言へど、御心とまるばかり聞こえなすを、

「いたうけしきはましや。このごろのおぼる月夜に忍びてものせむ⁽³⁾。

まか⁽⁴⁾でよ」

とのたまへば、わづらはしと思へど、うちわたりものどやかなる春のつれづれにまかでぬ。父の大輔の君は、ほかにぞ住みける。ここには時々⁽⁵⁾

(2)(1) 父の後妻。
 おつしやつたことがはつきり事
 実としてあらわれての意から。
 おつしやつた通りの意となる。
 (4)(3) 陰曆十六日の夜の月。
 姫宮に於て(演奏条件がわる
 くて)お氣の毒な(私としては
 はらはらさせられる)ことでは
 ね、の意であらう。「かたはら
 いたし」は、第三者としての自
 分が、他者の自分にとつては
 望ましいと思われたい行動をし
 ていたり、状態でいたいするの
 を、その傍らで見聞きして居た
 たまれない思いでいる意。ただ
 どう批評するかを氣にどう見
 ないでいる意が原義ともい
 う。この場合「人の思わくが氣に
 なる」の意となる。
 (5) 絃楽器は空氣が乾燥している時
 多い音がでる。臘月夜は濕氣が
 多い。
 (6) 「さめる」の「ン」無表記。
 (7) 「もよほす」は促す・すめる。
 (8) 「ねたし」は相手に對して劣つ
 た立場に立たされた時、いまい
 ましい・癪だなど感じる氣持
 いる部屋。
 (9) 常陸宮邸で命婦がふだん使つて
 いる部屋。
 (10) 貴族の邸宅の正殿。
 (11) 寝殿や對の屋の四面を覆う建
 具。柱と柱の間にはめて上下に
 分け、上の部分は引き上げるこ
 とができる。

ぞ通ひける。命婦は、^{(1) ままは}繼母のあたりは住みもつかず、姫君の御あたりを
 むつびて、ここにはくるなりけり。

⁽²⁾ のたまひしもしるく、⁽³⁾ いさよひの月をかしきほどにおはしたり。

「いと⁽⁴⁾かたはらいたきわざかな。物⁽⁵⁾の音^ねすむべき夜のさまにもはべら

ざめるに」⁽⁶⁾

と聞こゆれど、

「なほあなたに渡りて、ただ⁽⁷⁾一声ももよほしきこえよ。むなしくて帰

らむが、⁽⁸⁾ねたかるべきを」

とのたまへば、⁽⁹⁾うちとけたる住み^す処^かにすゑたてまつりて、うしろめた

うかたじけなしと思へど、⁽¹⁰⁾寝殿に参りたれば、まだ⁽¹¹⁾格子も⁽¹²⁾さながら、梅

(12) 屋間から上げたままで。

(1) 部屋のかなから外を見る。「見入る」の対。

(2) 「ものす」はその動作・状態を具体的に表現しないでもそれと諒解できる場合に用いる動詞。

(3) 「はべり」は対話敬語。口語の「ます」に近い。

(4) 下二段活用。「たまふ」は「見る」「聞く」「思ふ」などの動詞の下に付いて自己の動作を表わす謙讓語。「らるる」は自発の意。

(5) 下に「まうで侍りつる」等省略。常陸宮邸への出入り。

(6) 残念だ。期待外れで惜しい。「朽ち惜し」が語源か。

(7) 「なれ」は伝聞推定の助動詞「なり」の已然形。「あなた(命婦)」のその話で推定すると「琴の音を聞き分けてくれる人がどうやうあるようですね」と解いておく。河海抄(四辻書成著)は「琴の音をきき知る人のあるべきに今ぞ立ち出でて緒をもすぐれば」(古今六帖では三句有りければ)を引き、花鳥余情(一条兼良著)は、列子(湯問)に「伯牙が琴を弾くと鍾子期は直ちにその意中を察したが、鍾子期の死に当り伯牙は「知音者」を断ったという話を知く。なのおは「聞き知る人こそあなれ」は「もののはれ知る人こそあなれ」

の香をかしきを見出だしても(1)のしたまふ。(2)よきをりかなと思ひて、

「御琴の音いかにまさりはべらむ、と思ひたまへらるる夜(4)のけしきに

さそはれはべりてなむ。(5)心あわたたしき出で入りに、えうけたまはら

ぬこそくちをしけれ」(7)

と言へば、

「聞き知る人こそあなれ、(8)もしきに行きかふ人の聞くばかりやは」

とて、召し寄するも、あいなう、(10)いかが聞きたまはむと、胸つぶる。

ほのかにかき鳴らしたまふ。をかしう聞こゆ。なにばかり深き手なら

ねど、物の音が(12)らの筋ことなるものなれば、聞きにくくもおぼされず。

いといたう荒れわたりて、さびしき所に、(13)さばかりの人の、古めかしう、